

第四回記念式に於ける中川學校長祝詞

著者	中川, 元
雑誌名	龍南會雜誌
巻	3 0
ページ	1 - 2
発行年	1894-11-03
その他の言語のタイトル	第四回記念式に於ける中川学校長祝詞
URL	http://hdl.handle.net/2298/4446

第四回紀念式に於ける中川學校長祝詞

本日、此の校の第四回紀念式を行ふに當りて、貴顯紳士の列席を辱うと、謹み敬ひて、かねて、下したまへる

勅語を奉讀す。かくかしこき

勅語を下し、かく、大なる此の校を建てたまひしは、實に、山より高く、海より深き

皇恩にして、此式は其の本に報ゆる務にぞある。抑、人の本は父母あり。其の父母の本源に溯りて、爾の祖を念ひまば、其の祖先は、數千年の前に、恭ま

皇祖に仕へ奉りて、誠忠を盡し、人々ありけんは、まがふかたきぞかし。夫孝は徳の本とかや、各自おのがじや至孝を盡さんと欲せば、夙夜懈らず學を勉めて、大に、祖先の遺業を擴張すべし。是上は、萬古不易の皇室に、猶、誠忠を盡し奉らん始にして、下は、身を立て道を行ひ、名を後世に揚げて、父母を顯す孝の終とやいふべからん。かゝる一墨兩全の孝は即忠、忠は即孝とある皇國の中に、わけて、

神武天皇の奮ひ起り給ひし九州に、只、一ある此の校なれば、校運日々に開々つゝ、第一回紀念式よりも、第二回紀念式には、學生の増しを知り、第二回紀念式よりも、第三回紀念式よりは更にをしへ子の多きありしをれば、第三回紀念式よりも今日の式には、近く九州七縣の内より來る人のみかは、遠く東京を始として、山形、神奈川、石川、静岡、三重、奈良、和歌山、滋賀、京都、大坂、兵庫、鳥取、嶋根、香川、徳島、高知、愛媛、岡山、廣嶋、山口より、或は沖繩までよりも、新に來集つぎへる人々二百にきん餘りけ

は。之を在來の生徒に合すれば、其の數六百に滿ちあんとす。此の景況のどこしあへならん事は、白川の、天の一方へ清く流れて、晝夜に千尋の海へ注ぐに似、此の式の百千回に至らん事は、青松の、校の四面に繁く榮ゐて、年月に、常盤の色を増すが如くあらん。されば、本を忘れず、偏ふ、勉強して、愈此の校の名を、天下に掲げあば、後には、北海道よりは、いふも更あり。千里を遠きとせずきて來る者あらん事を期するにこそ。

明治二十七年十月十日

